

本邦最初の『三国演義』の翻訳-『為人鈔』に就いて-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 徳田, 武 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/5145

本邦最初の『三国演義』の翻訳

——『為人鈔』に就いて——

徳田 武

日本人による『三国演義』への関連の最も早い例は、慶長九年（一六〇四）までの林羅山の既読の書の目録（『羅山林先生集』付録巻一）に『通俗演義三国志』が見えることであろう。第二は、寛永二十年（一六四三）に没した天海僧正の蔵書中に『新録全像大字通俗演義三国志伝』（明、福建、劉龍田喬山堂刊本）と『李卓吾先生批評三国志』（明刊本）が存し、またその蔵書目録『日光山文庫書籍目録』に『三国志演義』が見えることであろう。^(注1) 演義小説とはいえ、文言を基調として白話を用いることが比較的少い『三国演義』は、唐話学が興隆する以前の近世初頭から邦人に読まれ、関心を持たれていたのである。しかし、その最初の翻訳は、羅山の閲読から約八十年後の元禄二年（一六八九）から五年にかけて、ようやく刊行された『通俗三国志』（文山訳。京都、吉田三郎兵衛刊）まで待たなければならなかった、というのが通説であった。ところが、中江藤樹が著者であるといわれる『為人鈔』^(注2)（寛文二年、一六六二、河野道清刊）の内に『三国演義』の話を翻訳しているものがあることを、数年前に見出した。これが認められれば、部分訳ではある

が、邦人による『三国演義』の最も早い翻訳(只今のところ)、という意義を担うものになる。よって、このことを報告し、且つ、翻訳上の問題点の幾つかを述べてみよう。

二

『為人鈔』巻第五の第七「賊臣董卓之弁」は、その他の各章と同じく、「昔、智アル人ノ謂ルハ」という定まった書き出しで始まるが、以下、翻刻本で十八頁に亘る内容は、

漢の献帝の御宇、董卓が絶大な権勢を持ち、二十五万人の入夫を塙塙にやって大家を造り、二十年の糧食を備え、十五歳から二十歳の美女八百人を召しかかえた。そして、諸国の降参の士数百人や司空張温を惨殺したので、司徒王允は自邸の後園の款冬花の側らでこれを憂えていると、歌舞の美人貂蝉(原文作蟬)が心配して声をかける。王允は貂蝉に「連環ノ計」を実行するよう教唆するが、それは、董卓とその「義児」呂布が酒肉に溺れているのを利用し、貂蝉を先に呂布に嫁せしめ、後に董卓に献与して、呂布を怒らして董卓を殺させよう、というものである。翌日、王允は呂布を招いて貂蝉を引き合らし、すっかりその容色にとらかされた呂布にこれを献ずることを約束する。その後、王允は董卓を自邸に招待し、帝位に即くことをそそのかし、貂蝉をして歌舞せしめ、これを董卓に献上したので、董卓は貂蝉と同車して自邸に帰る。呂布がこれを知って怒ると、王允は、董卓は呂布の婚姻を援助すべく貂蝉を伴ったのだと弁解して、ひとまず呂布の怒りを解く。翌日、呂布は董卓が彼女を幸したことを董卓の侍女から聞き、貂蝉の様子を窺うと、彼女はいとも憂愁を含んだ風情を示す。呂布は家に戻るが、その妻は彼の顔色が悪いのを見て訳を問ひ、呂布はさらぬ体を装う。董卓が病むと、貂蝉は献身的に看護し、一方では呂布に対して辛苦に耐えられぬ面もち

を見せる。董卓は呂布の貂蟬に挑む様子に気づいて、呂布を叱ると、呂布は恨みを抱く。李儒が董卓に対して呂布を取りなすので、董卓は呂布に黄金十斤と錦二十匹を与え、呂布も機嫌を直す。ある日、呂布は、董卓が献帝と語る隙を見て、董卓の邸に來たり、鳳儀亭にて貂蟬と口舌を交わすが、そこに董卓が戻り來って一喝したので、呂布は逃げ出す。李儒は再度、董卓に対して楚の莊王の絶纓会のお故事を持ち出して、その怒りを鎮める。貂蟬は貂蟬で、呂布が無礼だと董卓に嘆き、董卓は貂蟬を堀場に避難させることにして、李儒の諫言をも聴き入れずに、彼女を堀場に送り出す。貂蟬は偽って車上において悲泣し、呂布はこれを望んで悵然とする。王允は呂布に対して董卓の非道をたきつけ、董卓を伐つことを提案、この密謀に土孫瑞・黄琬も加って、李肅を堀場の董卓のもとに派遣し、献帝が董卓に讓位すると欺いて、董卓を都に戻らせる。董卓が禅位の儀式のために登城すると、王允は伏兵と呂布をして董卓を伐たせる。

という話である。この話はあまりにも有名で、すぐに『三国演義』第八回「司徒王允説貂蟬 鳳儀亭布戲貂蟬」から第九回「王允授計誅董卓 李催郭汜寇長安」に亘る連環計のものがたり故事であると分る。

この連環計故事は、正史『三国志』には殆ど記述されていず、元曲「連環計」や元の至治年間刊『全相三国志平話』卷之上「王允献董卓貂蟬」「呂布刺董卓」の話から発展したものであることは、研究者にはよく知られたことである。元曲「連環計」と『全相三国志平話』の話とは、右に紹介した話とは大きく異なるし、『為人鈔』の著者がこれらの稀観書（当時において）を目撃していたとも思えない。そうとすると、『為人鈔』の著者は『三国演義』から右の話を取り來ったのである。

三

『為人鈔』の翻訳ぶりが如何ようなものであったかを窺うべく、連環計故事の内でもとりわけ面白い鳳儀亭の場面に就いて、『李卓吾先生批評三國志』の本文と対照させてみよう。一番下に参考として『通俗三國志』の訳文を添える。

李卓吾先生批評 三國志

為 人 鈔

通俗 三國志

是日布引卓來到内門階、畧住少時、見卓与猷帝共談、呂布慌提戟、出内門、上馬遙投相府来、繫馬于道傍、提戟入後堂、尋覓貂蟬。貂蟬見布尋覓、慌忙出曰、汝可去後園中、鳳儀亭辺等我、我便来。布提戟逕往、立于亭下曲欄之傍。良久見貂蟬、分花私柳而来、果然如月宮仙子、泣与布曰、我雖非王司徒親生之女、待之若神珠玉顆、一見將軍、大人肯許、妾已平生願足、誰想太師、起不仁之心、將妾淫汚、恨不得死耳。今幸將軍至此、妾表誠心、此身已汚、不得復事英雄、愿死于君前、以絶君念。言畢、手攀曲欄、望荷花池使跳。呂布慌忙抱住、泣曰、我知汝心久矣、恨不能勾共語。貂蟬手扯布曰、妾今生不能勾与君為妻、願相期于後世。布曰、我今生不能勾以汝為妻、非世之

或時、呂布ハ、董卓力心ヲナグサメン其為ニ、ヤヤ倡ヒテ、禁門ノ階ニ行タリシニ、思ノ外ニ、猷帝二見エ奉テ、共ニ話ルヲ、遙ニ見テ、呂布ハ、コロコビ急キ出テ、馬ニ乗、徑チニ相府ニ飯テ、馬ヲバ門外ニツナギ置、戟ヲ提テ、後堂ニ入り、貂蟬ニマミエン、ト、足ハヤニ来ルヲ見テ、貂蟬、ヤカテ、サトリツツ、先、後園ノ鳳儀亭ニ行タマヘ、我モ參リテ見エン、ト、懇ニ告ケレバ、呂布ハ、先チ行去テ、欄干ノ旁ニ今ヤ遲シ、ト、待タリケリ。暫ク有テ、貂蟬ハ、玉ノ璽珞首ニ飾リ、妙ナル衣装身ニ纏ヒ、花ニ傍ヒ、柳ニ隨テ、サモ青陽ナル粧ハ、恰モ月宮ノ仙子ノ如シ。稍既ニ歩ミヨリ、流ルル涙ヲサヘツツ呂布ニ向ヒテ、云ケルハ、我ハ是、司徒王允ガ真ノ女ニハ

アル日董卓朝ニ出テ、天子ト政ヲ論シケレバ、呂布ハ常ノ如ク戟ヲ執テ内門ニ立チ、ヨキ隙ナリト思フテ、只一人馬ニ乗テ相府ニ回り、戟ヲ持ナガラ後堂へ入テ、貂蟬ニ遇ント尋ネケレバ、貂蟬モ内ヨリ走り出テ、將軍園ニ行イテ鳳儀亭ニテ待玉ヘ、我モ跡ヨリ參ラント云フ。呂布大イニ喜ビ、急ギ後園ニ出テ、鳳儀亭ノ曲欄ニ靠リ、戟ヲ杖イテ待チケル所ニ、暫アリテ貂蟬、花ヲ分ケ、柳ヲ私テ出来レリ。其粧ヘル姿ハ、画ニ書トモ筆モ及ビ難ク、月宮ノ仙子、化シテ此土ニ来ルカト怪マル。貂蟬涙ヲ流シテ申シケルハ、我王司徒ノ為ニハ、実ノ女ニテハ候ハネドモ、幼ヨリ恩愛ノ深キコト、骨肉ニ過タリ、天下英雄ノ土ヲ扱ンデ、嫁シメント云玉ヒシニ、一度將軍ニ見エテ平

英雄也。貂蟬曰、妾度日如年、愿君憐憫而救之。布曰、我在内庭偷空而来、恐老賊見疑、必当速去。提戟轉身。貂蟬牽其衣曰、君如此懼怕老賊、妾身無見天日之期也。布立住曰、容我思付一計、共你团圜。貂蟬曰、妾在深閨、聞將軍之名如轟雷灌耳、以為当世一人而已、誰想反受他人之制乎。言訖淚下如雨。兩箇偎々倚々、不忍相離。

アラザレドモ、幼年ヨリ愛スル事、真珠玉顆ノ如クナリ。サレバ、一タビ將軍ニ見エテ、今マテ相馴マイラセバ、カホトニ、物ハ思ハジヲ、誰力想ハン、太師、忽、不仁ノ心ヲ起スノミナラズ、禽獸ニ近キフルマヒニ、妾身既ニ汚サレタリ。女心ノハカナサハ、今マデ、命ナガラヘテ、將軍ニマミエ奉ル事、羞ヲ忍ニ所ナシ、將軍ハ、初ヨリ、誠ヲ尽ス志、妾ハ汚レシ身ノ風情、何ノ面目アツテ、英雄ニ事ヘ奉ランヤ。偏ニ將軍ノ前ニテ死シ、君ガ念ヒヲ断ベシ、トテ、欄干ニ攀上リ、蓮ノ池ニ臨ツ、既ニ身ヲ投ン、トシタリシヲ、呂布ハ、慌テ抱トメ、ヤウクニイタハリテ、涙ヲ流シ云ケルハ、吾、素リ、汝ガ心ヲシル事久シ、タダ恨ラクハ、一日片時モ、共に語ルノ期ナキ事ヲ。貂蟬、聞テ、サレバ、初ヨリ今マデモ、將軍ニソヒマイラセバ、妾ガ身、尋常ノ願、何事カ是ニマサラン。カナシキカナヤ、今生ニテハ、君ガ妻トナル事叶フマシ。タダ願クハ、後世ヲ契ラント、速キ妹背ヲ告ケレハ、呂布ガ、曰、我今生ニテ、汝ヲ得テ、妻ノ契リヲナサズンバ、再ビ、世ノ英雄トナルベカラズ、ト、堅キ誓ヲナ

生ノ願ヒ足レリト思フ所ニ、案ノ外ニ董卓師不仁ノ心ヲ起シテ、妾ヲ奪ヒ玉ヘリ、妾明暮將軍ヲ思ヒ沈ト云ヘドモ、ソノ志ヲ知ラシムルコト能ハズ、今幸ニ逢フコトヲ得タリ、此ノ身既ニ汚レタレバ、再ビ英雄ニ事フルコトヲ得ズ、今コノ所ニ死シテ妾ガ心ヲモ知ラセ奉リ、將軍ノ念ヲモ絶ベシトテ、前ナル蓮池ニ身ヲ投ントス。呂布急ニ抱キ止メ、涙ニ咽デ申シケルハ、我ヨク汝ガ誠ノ心ヲ知ル、恨ムラクハ、夫婦ノ縁淺ウシテ浩ル禍ニ罹コトヲ。貂蟬、又、呂布ガ手ヲ執テ曰、妾今生ニテハ、將軍ノ妻トナルコト能ハズ、願クハ後世ノ契ヲ結バントテ、又、池ニ飛バントス。呂布推止メ、我モシ今生ニテ汝ヲ妻トセズンバ、豈世ノ英雄ト云フニ足ランヤ、必ズニハ志ヲ遂グベシト云ヒケレバ、貂蟬ガ曰ク、妾コノ処ニ在ツテ、一日モ一年ヲ送ルガ如シ、將軍憫ンデ救ヒ玉ヘ。呂布ガ曰、ワレ老賊ニ従ツテ朝ニ出デ、ヒソカニ隙ヲ伺ヒテ此ニ来レリ、若尋ヌルコトモ有ラン、先回ラントテ出デケレバ、貂蟬ヲ拽止テ申シケルハ、將軍左程ニ老賊ヲ怕レ玉フナラバ、妾イツカ心ヲ安ンスベキ。呂布立住テ曰、ワ

李卓吾先生批評 三國志

為人鈔

通俗 三國志

<p>シケレバ、貂蟬、聞テ、妾ガ身、深窓ニ在ナガラ、心ノ愁絶ザレバ、日ヲ度ルコト、年ノ如シ、願ハ、君是ヲ憐テ救タマヘ、ト告ケレバ、呂布ガ、曰、我、此日、董卓ヲ伴ヒテ、禁庭ニ在ケレドモ、アマリニ、心ノアコガレテ、閑ヲ儉テ、爰ニ来レリ、遅ク飯リテ、董卓ニ疑ハレテハ、貂蟬ニ、逢瀬ノ末モ、アダ浪ノ、立名モ、サスガ、オソロシケレバ、先、スミヤカニ飯ルベシ。貂蟬、聞テ、実々、將軍ノ太師ヲ恐レタマフハ、コトハリ也、深キ盟ヲ恋章ノ、ハヤ顯レテ、カクゾトモ、見付ラレテハ、詮モナシ。ハヤ／＼カヘリ給ヘ、ト、云フ。呂布ガ、曰、外ノ人目ニ憚リテ、心ノ閑ノ隙モナシ、何レノ時ゾ、計ヲ企テ、汝ト比翼ヲ契ルベシ。貂蟬カ、曰、誠ニ、呂將軍ノ名聞ハ、雷鳴ヨリモ甚シ、然ハ、当世ノ英雄、一身ノ上ニ留メタリ、ト、云モ果又ニ、流ルヽ涙雨ノ如シ。互ニ、口説恨アヒ、別ルヽ袖ニ、時ヲ移ス。</p>	<p>レ計コトヲ連シテ、心安ク汝ト契ラン。貂蟬ガ曰、妾深キ閨ノ中ニ在リテモ、將軍ノ名ヲ聞イテ、世ニ双ナキ英雄ト思ヒシニ、今何トテ人ノ下ニ立玉フソトテ、涙ヲ流スコト泉ノ如クナレバ、呂布心空ニ泛レテ、手ニ手ヲ取ツテ伏軫ヒテゾ居タリケル。</p>
---	--

右の比較によって、『為人鈔』「賊臣董卓之弁」が『三國演義』を翻訳したものであることは、大方に納得されたと思
うが、それでは訳者が『三國演義』のどのような版本に拠って翻訳したのか、という点、早急には回答できない。巷間

に流布している毛宗崗（毛声山の子）批評の第一才子書本が我が国に渡来した最初の記録は、元文元年（一七三六）の『舶載書目』であるといふから、訳者の拠った版本は、勿論、それより前に刊行された明版である。しかし、一概に明版といっても、孫楷第の『中国通俗小説書目』には二十余点も列挙されており、早急には目睹し得ぬものも多いので、直ちに所拠の版本を定めることはできない。ただし、所拠の版本を定めるための手掛りは存する。即ち、『為人鈔』の、貂蟬が初めて董卓に引きあわされる場面で、貂蟬が唱う歌を原文のまま掲げる所である。それは、

一点桜花啓三絳唇、兩行碎玉噴三陽春、丁香舌吐擗三剛劍、要斫奸邪乱国臣

というものであるが、試みに、吳観明刊本『李卓吾先生批評三国志』を見ると、これを、

一点桜桃啓絳唇、兩行碎玉噴陽春、丁香舌吐衝鋼劍、要斬姦邪乱国臣

に作る。圈点部分の異同に着目すると、『為人鈔』の訳者は吳観明刊本『李卓吾先生批評三国志』を用いたのではないようである。手元にある京都大学蔵『精鐫合刻三国志全伝』（京都大学漢籍善本叢書18）の本文も「一点」を「一埋」、「擗剛劍」を「衝剛劍」に作っていて、異同が存し、所拠本とはいえないであろう。（ただし、「要斫」（斫ラント要ス）の二字は同一である）。スペインのエスコリアル修道院蔵の『新刊按鑑漢譜三国志伝絵象足本大全』を影印した『三国志通俗演義史伝』（井上泰山編。関西大学出版部）も、問題部分の字を「桃」「衝剛」「斬」に作っていて、異同があり、所拠本とはいえないようだ。このような対校作業によって、右詩の本文が一致する版本を求めることが要請されるが、今、右以外の版本に就いての対校の機会を得ないので、今後の課題としておく。（付記参照）

ここで、翻訳の様相を述べる段階となったが、第一に、右の「要斫」に何の訓点をも施さなかったことに見られる如く、『為人鈔』の訳文には、間ま誤りや誤訳が存する。傍線部①「徑」を「コミチ」と訓じて用いているが、どうして「遥投相府来」という原文を訳するのに、この字を用いるのかが分らない。「逕チ二」を誤ったものであろうか。傍線

には見えず、従つて関索説話は『三国演義』にしか存在しないからである。(一九六七年、大陸で発見された『成化本説唱詞話』一九七三年、文物出版社刊の『花関索伝』は、まず訳者の目録には入らないであろうから、今の場合、考慮に加える必要はない。)

その関索説話を『為人鈔』では如何に訳しているかを窺うことは、『為人鈔』が拠つた版本の見当をつける一助となる。よつて、前の例と同様、原文、同書訳、『通俗三国志』訳を対照させて引いてみよう。

李卓吾先生批評 三国志	為 人 鈔	通俗 三国志
<p>忽有関公第三子関索、入軍来見孔明曰、自因荆州失隔、逃難在鮑家庄養病、每要赴川、見先主報讐、瘡痕未合、不能起行、近日安痊、打探得東吳讐人已雪、逕来西川見帝、恰在途中、遇見征南之兵、特来投見。孔明聞之、嗟呀不已、一面遣人申報朝廷、就令関索、充為前部先鋒、一同征南。大隊人馬、各依隊伍而行、飢食渴飲、夜住曉行、所經之處、秋毫無犯。</p>	<p>忽チ、一少年ノ將軍一騎打テ来ル。是ヲ誰トモ不レ知処ニ、孔明、喚入テ、相對ス。其時、名乗テ曰、某ハ雲長ガ第三番目ノ子、関索ト申者ナリ。既ニ、荊州ノ軍敗北ノ時、難ヲ鮑氏ガ家中ニ遁レテ、病氣ヲ保養シテ居タリシガ、或時、西川ニ赴ントシテ、来テ、先主劉備ニ見テ、父ノ為ニ讐ヲ報シテ、敵ノ為ニ疵ヲ被ル。其疵ノ痕未レ痊、因テ、諸所ノ軍ニ不レ出合。近日漸平愈ス。因レ茲コトニ来ル。願クハ、帝ニ見エ奉ラン、ト、思フハ如何ニ、ト、云ケレバ、孔明、是ヲ聞テ、感嘆シテ不レ止。人ヲ朝廷ヘ差遣シテ、此旨ヲ奏達シ、関索ヲ、魁ノ大將軍ニ定テ、三軍ノ推行所、秋毫無犯ス事ナシ。</p>	<p>関羽ガ二男関索ト云フ者、馬ヲ飛シテ来リ見ユ。孔明コレヲ見テ涙ヲ流シ、荊州ノ破レタル時、汝ステニ、討レヌルヨト思ヒシニ、今マデ何クニ在リタルト問ヘバ、関索申シケルハ、荊州ノ破レシ時、身深手ヲ被リシカバ、鮑氏ノ家ニ隠レテ病ヲ養ヒ、先帝ノ呉ヲ攻玉フ時モ、金瘡イマダ痊ズシテ、打立ツコト能ハズ、今丞相ノ、南蛮ヲ征シ玉フト承リテ、早々ニ馳来レリ。孔明コレヲ聞イテ、嗟嘆シテ已ズ、朝廷ニ奏問シテ、聽テ先手ノ大將トシ、大軍ノ通ルトコロ、秋毫無犯スコト無シ。(「二男」は『通俗廿一史』本の本文に拠る)。</p>

『為人鈔』の右の文章を見て、それが『三国演義』の翻訳であることが確認されたと思う。同時に、その閑索説話の内容が、呉観明刊本『李卓吾先生批評三国志』のそれと同一であることも見当がつくであろう。『為人鈔』の訳文は、西川に赴こうとして劉備に遇い、父のために仇を報じて負傷した、となっているもの、それは誤訳であって、『通俗三国志』の如く、先主に見えようとしたが傷が癒えないので出立できなかった、というように訳さなければいけないのであるが、それはともかく、呉観明刊本と同一内容の閑索説話を翻訳したものであることは認められる。この呉観明刊本と同一内容の閑索説話を備えている『三国演義』は、約三十種の明版の内でも、周曰校本・夏振宇本・鄭以禎本・夷白堂本・呉観明本・緑蔭堂本・黎光楼本・鍾伯敬本の八種であることが、中川諭氏著『三国志演義』版本の研究』によつて分る⁽⁷⁾。この内、呉観明刊本は、貂蟬の唱う詩の文言が『為人鈔』のそれと完全には一致しなかったことは前述したが、さすれば、呉観明刊本を除く他の七種の版本で、貂蟬詩の文言が完全に一致しているものが『為人鈔』訳者の拠つた版本である、という見通しが立てられるのであるが、事はさようにうまく行くか、今後の課題としておく。

右の問題と並んで重要な、もう一箇の問題は、『通俗三国志』の訳者は『為人鈔』の訳文を参照していたか、ということである。たとえば、右の閑索説話の最後の傍線部分を、『為人鈔』も『通俗三国志』も同一の「秋毫毛犯スコトナシ」という文で結ぶ。(この場合、「コト」や「ナシ」を漢字で表記するか否か、という異同は無視してよいであろう。)その部分の原文は「一同征南」以下三十字であつて、それを「秋毫毛犯スコト無し」とだけ訳すのは、原文を大きく省略した訳、というべきであろう。直訳であれば似通うのは自然なことであるが、原文を大きく省略した訳が一致している、ということは、単なる偶然とは思えない。もう一つ、連環計故事に遡つて、王允が牡丹亭で貂蟬を見出す場面の、貂蟬の描写を比較してみる。(次頁表参照)

この場合は、『為人鈔』も『通俗三国志』も、貂蟬の容姿を原文とは大きく隔つた表現で描写するのであるが、両者

其女自幼選入充樂女。允見其聰明、教以歌舞吹彈。一通百達、九流三教、無所不知、顏色傾城、年當十八。

此女子、幼キ時ヨリ選テ、樂女ノ中ニ置、聰明ナルニ隨テ、歌舞ヲ教ヘ、籥瑟ヲ授レバ、一度通シテ、百ノ曲ニ至リ、且、九流三教知ズ、ト、云所ナシ。容兒ハ、春ノ花ノ粧ヒ、垂柳ノ露ヲ含メルニ、異ナラズ。毛嬙西施モ、是ニハ、イカデ、マサルベキ。

此ハ幼ヨリ選ンデ樂女トシケルガ、生レ付聰明ニシテ、心ザマヤサシカリケルユエ、常ニ憐ンデ我子ノ如クシ、歌舞吹彈ヲ習ハシケルニ、一通百達、九流三教、極メズト云フコトナシ。天ノ生セル姿ハ露ヲ含メル芙蓉ノ如ク、一タビ笑メバ夷二国ヲモ傾クベシ。

の表現は傍線部分に見る如く似通っているものがある。以上のように、原文とは大きく隔った意識部分に同一の文言、似通った表現が幾つか存するということは、『通俗三国志』の訳者が『為人鈔』に『三国演義』を翻訳した文章があることに気づいており、自身が訳出するに際して『為人鈔』の訳文を参照していた、ということ語るものであろう。『通俗三国志』の訳文は、『為人鈔』のそれよりも正確になっており、『為人鈔』訳文の誤りは踏襲していないが、原文が余りにも簡潔で、そのまま直訳したのでは日本文として何か治まりが悪いような場合においては、『為人鈔』の、原文とは大きく隔った意識のしかたを取り入れている、といつてもよからう。

五

『為人鈔』の翻訳は、当時においてもさほど容易に入手できるとは思えぬ明刊本『三国演義』に就いて、連環計故事

本邦最初の『三国演義』の翻訳——『為人鈔』に就いて——

の如き代表的な面白い部分と、孔明の智略譚という、いかにも武士が喜びそうな部分とを選び出して、ままた誤訳はあるものの、その内容を大過なく知ることができる程度には訳出し得たものであった。新渡の舶来小説の優秀性を認めて、膨大な原作の中の極く一部ではあっても、いち早く読過し訳出するような先駆性と学殖とは、相当な知識人でなければ持つことができないものであろう。さればこそ、『通俗三国志』のような本格的な訳業を引き出す刺戟の一つになっている、と思う。すなわち、『為人鈔』の翻訳は、現在知られる限りでは、『三国演義』の本邦における最初の翻訳（一部ではあるが）、という史的意義を備えるものであるが、史的意義のある仕事というものは、それだけの着眼力と学殖に支えられているのであって、それを有する知識人として中江藤樹並みの人物が擬定されるのである。この意味において、当時の書籍目録が『為人鈔』の作者を中江与右衛門こと藤樹としているのには、ある程度、蓋然性が存する。また、和漢の故事を俗解して教訓を垂れる『為人鈔』全編の内容も、藤樹の著述らしく見える点がある。だが藤樹の著述と断ずるには注2に述べた如き疑問点もあって、この問題はなお後日有力な傍証が出てくるまで課題としておかねばならない。

注

- (1) 林羅山の『三国演義』閲読については、中村幸彦氏「唐話の流行と白話文学書の輸入」(『中村幸彦著述集』第七卷三十一頁)に言及があり、天海蔵書については、長沢規矩也氏『日光山「天海蔵」主要古書解題』に表記二種の解題がある。
- (2) 朝倉治彦氏編『仮名草子集成』第五卷『為人鈔』解題。『為人鈔』の中には著者名を明記していないが、『新增書籍目録』(延宝三年刊)以下の書籍目録に著者名を「中江与右衛門」とする。ただし、苦甜齋守株による跋の年時の万治二年(一六五九)は藤樹の没年慶安元年(一六四八)よりも後のものであり、藤樹の著述と速断することには疑念が抱かれる。
- (3) この題目は、暫く明の吳観明刊本『李卓吾先生批評三国志』(拙編『対訳中国歴史小説選集』4)目録のそれを用いる。ちなみ

に後世に流布した毛宗崗評第一才子書本では、第八回は「王司徒巧使連環計 董太師大鬧鳳儀亭」に、第九回は「除凶暴呂布助司徒 犯長安李傕聽曹詔」に作る。

(4) 元曲「連環計」と『三国演義』の関係は、狩野直喜氏『支那小説戯曲史』第七章「演義三国志」と『西遊真詮』に述べられる。また、『全相三国志平話』と『三国演義』との関係は、鄭振鐸氏「三国志演義的演化」(『中国文学研究』上冊、古文書局)に詳しい。

(5) 注(1)前掲中村幸彦氏論文三十一頁。『柏載書目』は、関西大学東西学術研究所資料集刊七として影印されている。

(6) 同氏著『中国小説氏の研究』第二部第二章「関索の伝説そのほか」。

(7) 中川氏は他に英雄譜本・毛宗崗本・李漁本をも挙げておられるが、英雄譜本(『精鵠合刻三国水滸全伝』)は、文章に異同が見られるので、これを除く。また、毛宗崗本と李漁本も、『為人鈔』作者が目睹できなかったであろう清版なので、これを除いた。

二千年八月二十六日。

付記

『桜陰腐談』(正徳二年、一七一二、刊。宝永七年、一七一〇、序)の著者梅国は、『三国英雄志伝』を目睹していた(巻二、「関羽為護伽藍神」)。「新刻按鑑演義全像三国英雄志伝」(楊美生本。大谷大学蔵。未見)であろう。かような版本も、当時渡来していたから、調査する必要がある。

(とくだ・たけし 法学部教授)